



僕のいところが

オレっ娘で

ニーソ履きつつ

もによりつつ

.....の感想文

「僕のいとこがオ……」を読んで (1/5)

本の感想文などという作文の題名は、(読んだ本のタイトル) + (を読んで) としてしまうのが定石だろう。もっとも、真面目な人間、プレゼンテーション能力のあるやつなどは、人を惹き付けるような題名を考えられるのだろうが、自分には、まあ無理だ。そんなもんで、毎度のようにタイトルを付けようとしたのだが、この本の題名はあまりにも長過ぎる。「僕のいとこがオレっ娘でニーソ履きつつもによりつつ」これだけで24文字もあるじゃないか。1行20文字の原稿用紙だったら、題名だけで二行に渡ってしまうじゃないか。

いや、これは手書きの原稿用紙ではないから別にそんなことは気にせず、いつも通りにやればいいのではとも思えるが、そうではない。いくらなんでも長すぎる題名は不格好だ。それではただの要旨になってしまう。

まったく、この著者はいきなり、感想文を書こうとする者に挑戦を仕掛けている。嫌でもこの物語を把握し、咀嚼し、一言でまとめる事を強要してきているのだ。だが自分はそれを迂回する事にした。要するに、分かればいいのである。省略して、その中身はこの本文で補足すればいいのだ。だから、「『 1』を読んで」でもよかったのではあるが、それではまるで数学の代数みたいであまりに味気ない。結果、上方に提示してあるそのような題名になったわけである。

さて、前置きが長くなった。ここから感想を述べる。

この小説、中学2年生の夏休み、同い年の二人がお互いに行ったり来たりし、そこにニーソが絡むという成長物語だ。ややぼんやり気味で自身の無さげな「僕」。それから、そのいとこの二人が主役である。そして、このいとこが「オレっ娘」なのだ。

ところで、オレっ娘というとそのパターンはさまざま有り得る。このいとこの場合、ただ単に一人称を「オレ」と口にするだけらしい。

ここで一つ疑問がわく。ジェンダーの倒錯を読み手に意識させようとするならば、その生じたギャップを強調する事により読者の心にキュン、と訴えかけるものを著者は配置するはずである。例えば、ボーイッシュで言葉も荒っぽい、いつも頑強さを晒している少女が垣間見せるかわいらしさ。そういうものが目的には必要不可欠ではなかろうか。

ところが、このいとこに関しては、著者がただただ可愛らしい女の子に「わたし」の代わりに「オレ」と口にさせているとしか見えない。この著者は浅はかにも、「オレ」としゃべる女の子を登場させておけば面白いだろうと、安易に「オレっ娘」という言葉を使っていると疑わざるを得なかった。もちろん、地方によっては女性の一人称が「オレ」である可能性はあるが、このお話でそれはない。

浅はかといえばもう一点、指摘しておきたい。それは、「僕」が平穏な生活を望んでいると語っていることである。オレっ娘という人間に関わることを煙たく感じているという事を遠回しに表現しているのかもしれないが、それにしても唐突なのである。まるで、「僕」は戦乱の中を生きてきた人間であるかのように感じてしまう。そのことはこれ以上、語られることが無かったので、学校教育由来の平和主義者あたりだろうと目星をつけることにする。

「僕のいとこがオ……」を読んで (2/5)

本筋からやや外れてしまった。感想に戻る。

その中学生「僕」と「オレ」が住む場所は電車で1時間ほど離れているという。比較的近くにいる親類ということではあるが、そんなにしょっちゅう顔を合わせるわけでもないらしい。

そんな二人だが、自由研究を一緒にやって、簡単に片付けてしまおうという思惑が一致して、夏休みにたびたび会うことになる。遠くの親類より、まず近くの友達の手を借りないかと、多少の違和感を覚えなくはないが、共同研究は禁止されている、親しい仲のクラスメイトがいない、などと好意的に推測しておく。

「僕」の家より広いという理由で、二人の自由研究はいとこの家で主に行われる。ところで、この小説は「僕」による一人称の視点で書かれている。そのため、読み手は「僕」と同じく、いとこの「オレ」と間欠的に出会う体験をする。出会うたびに変化があり、そこには新鮮さも感じられたが、「オレ」のここが変わったということをやたら強調する著者はあざとい。

さて、ここでようやくニーソックスの話題が出てくる。

いとこの「オレ」はニーソに興味はあるが自分は履く気にはなれないという屈折した気持ちでいる。そんなことを「僕」に何気なくこぼす。

「オレ」は、かわいいとか可憐だという形容詞がよく似合い、スタイルも悪くないのでニーソはよく似合うらしい。ここでまた一つ、著者に苦言を呈したいと思う。「可憐だ」は形容動詞ではないか、などという些細なことではない。

先ほど、この小説は一人称の視点で書かれていると述べた。ところが時折、「僕」ではなく、著者自身が物語の舞台裏を説明するかのような文章が登場するのである。

該当箇所を引用する。「このかわいい美少女、いや、可憐なるという形容詞が適切か。しかも、ニーソを履いたら抜け目なしに似合うスタイル。そのワンピースの下にはそんなしなやかな肢体が埋もれてしまっている。お前の趣味趣向はどうでもいいと言いたくならないだろうか。これを「僕」がそう評価しているのならば、「僕」はいやらしい目でいとこを見ているのだろう、思春期だものねこの変態、などと自然に感じるはずだ。

このほかにも、このような著者の一人語りにより興をそがれてしまう部分はあるが、このシーンがいちばん気になったので指摘しておく。

またもや、感想から少しずれてしまった。続けよう。

ニーソは気になるけれども自分では履けそうもないと口にする「オレ」のことを、「僕」はそんな鬱屈しなくても気軽に試してみればよいのではないかといたわる。このちょっとしたことが「オレ」の中の何かを決心させたようである。人間、何が起ころかわからない。

そして、また別の日にふたりは会う。そこでは、いとこは自由研究を早めに終わらせてしまおうとし、実際、その通りに事は進んだ。「僕」もそれほど自由研究に熱心ではなかったもので、早めに片付いて何よりといったところだった。

そうして、空いた時間で何をするのかと思ったら、いとこの「オレ」は「僕」を連れ立たせ、買い物に行ってしまう。名目はそうだが、「オレ」の狙いはニーソを手に入れることだった。 そんなまどろっこしいことをするのは、「オレ」がニーソに対して大きな心理的障害を感じているということの現れだろう。ニーソを手にするすら、一人では勇気が出ないらしかった。

何ともかわいらしいものではないか。と同時に、他人からしたら意に介するほどのものでもないことでも、当の本人には一大事であるという、人の中にある落差のようなものをまざまざと感じた。「僕」は買い物に付き合わされることにややうんざりしていただけのようだったが。

ときに、このような場面で「僕」がやれやれなどと連発してつぶやこうものなら、再度、著者を糾弾しなければならなかったところであったが、それは杞憂に終わった。

その後、「僕」は自分の家に帰るつもりだったが、購入したニーソを「オレ」が家で試着することにもつき合わされる。しかも、「僕」もニーソを履くはめになる。正しくは、「オレ」がニーソを履くことに踏ん切りがつかなくて、拳げ句の果てに「僕」がニーソを履いて、「オレ」はニーソを履くことなく、「僕」のニーソ姿を見てどんなものかと品定めしているという状態になるのである。

そこで「オレ」がニーソを拒絶する理由、ひいては女なのに「オレ」という呼称を使う理由が少し明かされる。それは、「オレ」と自分のことを呼んだり、ニーソを拒否することで、心の安定を保っているらしいということであった。

しかし、それを聞き出す「僕」のほうは何とも情けないことになっている。「僕」はズボンをはいていた。そのため、ニーソを履いてみせるには、下半身は裸にならざるをえない。裾が長めのシャツのおかげで太ももがかすかに隠れる程度にはなっているものの、「オレ」にはパンツをちらちら見せながら、ニーソを次から次に履き替えるのである。

「オレ」のほうはどうせ親類どうしだからと気にしていない。むしろ、「僕」をいじって楽しんでいるようにも見える。一方の「僕」は、いとことはいえども、じっくり目の前でパンツまで見られてしまうのは気恥ずかしいと感じている。

ニーソに対する警戒心を払拭するためという名目、目の前で体を見つめられる恥ずかしさ、ニーソを拒否する心理への好奇心、そういったものが入り交じっている。このごちゃごちゃした雰囲気こそが思春期の青年そのものだとも、単にごちゃ混ぜにして、どうだ変だろうと言わんばかりに、著者の虚栄心が透けて見えているとも受け取れるだろう。

「僕」にとってはある意味散々だったそんな一日も終わり、自由研究も片付いたことで、「僕」と「オレ」が会う必要はなくなった。しかし、夏休みはまだまだ続く。そんなある日、「オレ」が「僕」のもとに押しかけてくる。あの、自分が履くことについては忌み嫌っていた“ニーソを装備”（原文ママ）してである。

これには「僕」もかなり驚いている。それまでニーソに対して興味はあるが自分が身に着けることは拒否してきた「オレ」が、自宅から外に出て、公共交通機関で多くの人目にされられてまで「僕」の所にまでやって来たのであるから、当然のことだろう。「オレ」は不安をぶちまけるような、達成感で興奮しているような、これまた、ややこしい感情を「僕」に向かって吐き出していた。

ところで、この本の題名にある「もによる」とはいかなるものなのか。国語辞典に載っている言葉ではないし、本文の中にも「もによる」という単語は一切出てこない。そこで、仮に「もぬく(=脱皮する)」が転じたものだとは仮定しつつ、ここまでの「オレ」のニーソに対する態度と突き合わせてみる。すると、こうなるだろうか。

一皮むけた状態になる一歩手前でもがいている。自分が今の状態ではちぐはぐな面があって、それを解決したいのだけれども、そこにたどり着けなくてもどかしい気持ちでいる。

この本には著者のあとがきがあるのだが、この本の内容についてはほとんど触れられていない。近況報告はまだいいが、この本について述べるのかと思いきや、「夏といえばスイカだけど、今年はまだ食べてませーん。」ときて、そんなものはお前の日記帳に書いておけと言いたくなる。タイトルからして謎なのだから、そのエッセンスをほのめかすくらいしてほしいものである。

また愚痴になってしまった。本題に戻る。

そうこうして、「オレ」の希望で「僕」はまたもや、一緒に街へ繰り出すことになる。今回は、ニーソを履いている自分を慣らしたいのだろうという「オレ」の気持ちをくんで、特別の配慮はすることもなく、「僕」は友達と遊ぶように、いとこの「オレ」に接していた。最初はもじもじしていた「オレ」も夕方になることにはすっかり、普通の「オレ」に戻っていた。

それと同時に、「オレ」ではなく「わたし」とも呼ぶようになっていたのである。ようやく、心の中のわだかまりが解けたと「僕」に告白している。「オレ」の中ではかわいいということがどこか許せない部分があって、どうにか抵抗していたその結果がニーソと一人称の「オレ」だったという。しかし、そんなものは自分一人の中の思い込みに過ぎないと、ようやく自分で納得できたとのことであった。

この場面は最後のヤマで、やや感動的でもあるのだが、違和感を覚える部分もある。それは、「オレ」が謎を引っ張っておいて最後にまとめて明かしてしまうということである。まるで推理小説の種明かしのようだ。

サスペンスならばそれで納得がいくのだが、普通の小説でそれではあまりにもわざとらしすぎはしないだろうか。青春もので、ひと夏の成長物語ということで、それをはっきり表現するためにこのような構成にならざるを得なかったのかもしれない。しかしそれならば、仕組みに気が付かないくらいに、もっと騙してほしかったと思う。

もっとも、読み手の感受性が低すぎるということは無きにしもあらず。反省すべきは読み手の自分であるかもしれない。だが、わたくしはこのお話に感動するほど、のめり込めなかったということは記しておきたい。

さて、読み終わり全体を見回してみると、またもや疑問が生じてしまった。それは、初めのあたりで述べたように、ふたりの成長物語であるはずが、いとこの「オレ」はいいとして「僕」のほうはどうだったのかということである。そもそも、成長物語という文言についてはあらずじにそう書いてあっただけなのだ。一人称の視点で「僕」そのものが語っていることは多数あるのに、最初と最後で何が変わったのかというと、何もないのである。どう読めば成長を読み取れるのか、今のわたくしには理解できない。なお、あとがきには、「夏休みが終わるってそのあとで学校で久しぶりに会ったやつが、こいつ、成長したなって感じたことあったね」という、どうでもいい著者の落書きがある。

「僕」のことについてはもう一つ不自然に感じることもある。14歳の男であるのなら、同い年の、それも、好印象を持っている女の子を目の前にして、何も感慨はないのかということである。

例えば、いとこを想像し、手淫に耽り、事後に罪悪感に苛まれるような、そんな潔癖さと欲望のせめぎ合いはなかったのか。ただこのように、自らの汚さを認知するとなると、純文学のようにもなってしまうかねないが。

この感想文ではほとんど無視したが、性的にいやらしい感じのする部分がそこここに登場している。それらは、あくまで読者のためという添え物にすぎなかったのだと切って捨てることもできる。しかし、その場合はこの本がこうやって感想文を書くにも値しない、ただ人間に（主に男子を対象に）悦楽を提供する事を目的とした小説と断ぜざるを得なくなってしまう。さらには、この感想文の価値もなきに等しいものになってしまう。

それは避けなければならない。そうすると、「僕」は少なくとも同じ年頃の女性には興味がないとするしかない。それならば筋は一応通る。しかしそれでは「僕」の言動から判断するに、自らの性的嗜好が社会的には厳しい局面にさらされ得ることを悟っていると考えなければならなくなる。そんな重たい小説だとは到底思えない。

ふと思ったのだが、「僕」は女ではないか。よくよく本文を見渡してみると、「僕」が男であることを確信できる記述はない。それはつまり、僕っ娘とオレっ娘のお話だったということだろうか。となると、印象が大きく変わってしまうではないか。

なんということだ。この著者は策士だったのか。甘い設定で穴を無数に設置しておいて、そこに読者がはまり、もがくようにしておいたのか。そうであってほしいがそうではなく、おそらく、思い付きをいくつも並べてみただけなのだろう。やれやれ、なんというものに感想を連ねてきてしまったのだろう。悔やんでも悔やみきれない。

だいたい、この主役ふたりの具体的な名前が出てくることはなく、「僕」「オレ」と記してある時点でいぶかしいものだと気がついていなければならなかったのだ。具体的な名前では固定したイメージが生じてしまいかねない、物語そのものにより肉薄できるように一般名詞を用いている、などと頭の片隅では考えていたのだが、この著者は名前を考えるのがただ面倒なだけだったのだろう。

最後に、あとがきの「またお会いできる日を楽しみにしています」に返答をしておこう。「二度は勘弁してください」と。



僕のいところがオレっ娘でニーソ履きつつもによりつつ.....の感想文は
[クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本ライセンス](#)の下で提供されています。

僕のいところがオレっ娘でニーソ履きつつもによりつつ.....の感想文
<http://p.booklog.jp/book/55691>

著者 : tztsts

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tztsts/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/55691>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/55691>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ